



りしんねんだいき

離神年代記 「埋葬」 第一章

饜えた街

秋本カイ

画戸谷展洋

『意識が生まれ、』

砕けた。

無数の欠片。

光を弾いて拡散する。

もう赤でもない、青でもない。

(落ちていくのか、上っていくのか)

女は万華鏡の中にいた。欠片と同じ速度で飛んでいる。

体がかくつと泳いで目が覚めた。目の前の車窓に自分の顔が

映っている。地下鉄の黒い窓。乗客は数人。闇の鏡に映っているのが自分であることはわかった。ただ見覚えがない。記憶を検索する。脳細胞が高速で答えを求める。『私は誰?』ヒットしない。

激しい動悸に襲われた。

(地下鉄に乗っている)

という、今を認識することは出来るのに。

(なぜこれに乗ったのだろう、どこへ行くこうとしているのだろう)

それが、わからない。

女は怯えた。

窓を挟んで狼狽える自分が見える。窪んだ眼窩、呆然と見開かれた瞳孔。小刻みに震える唇が叫びだしそうだった。右手で

口を押さえた。その手には静脈が浮き出ている。

立ち上がる。ちょうど電車もホームに滑り込んでドアを開けた。手摺りに縋り付きながら、まるで近親者の最期に立ち会おうとする人のように、女は駅に降り立った。

一歩目を踏み出すと、体は歩く動作を思い出す。歩き始めると、足は少しずつ速くなった。得体の知れない焦りに急ぎ立てられた。足が速くなっていくのを止めることが出来ない。走り出して男にぶつかった。

「こんな人ごみで走るな！」

舌打ちされた。周囲が振り返る。多くの目が彼女を見る。他者の意識に晒される。女は自分に向かって来る空気を感じた。意識は集合体となって、違和感を共有し始め、空気を作る。

『この女、どこか変だ』と……

女は歩く速度を緩めた。走りたい衝動を抑えつけた。

(パニックになっただけ)

女には自分にそう教える理性があった。

改札がある。

「ありがとうございます。助かりました」
嘘で通った。

まるで構内のトイレを借りたような、あるいは忘れ物を取りに行ってきたような、そんな演技で切り抜ける。ためらいもなく帳尻をあわせる知恵を持ち合わせていた。

階段下で見上げると四角く空が見えた。一段一段上ると、地

上の生暖かい空気が降りてくるのに行き会った。

外は暑かった。地上の人々は彼女を振り返らない。

(走ってはいけない。人の注意を引いてはいけない)

意識が生まれて、三分経って、三分ぶんだだけ、世界に慣れた。

女は、この不安は自分の中だけに閉じ込めておかなければならないと理解していた。

それでも立ち止まって、ゆっくり辺りを見回すほどの勇氣は持てない。この世界に慣れていないことを知られるのが怖い。さっきのように、人目をひいたらどう対処すべきなのがわからない。素知らぬふりで歩くしかなかった。黙々と歩き続けた。

(何もない)

記憶がないということは、次の瞬間への動機づけがない。あとはもう、意識が生まれてからこの数分の新しい記憶を反芻してみるしかない。

(改札というものはなかった)

人の会話もなかった。言語もわかるのだ。

歩き方もわかった。人や物とぶつからないルール。車・ウエイカート・自転車。みな、見慣れた乗り物だ。ビル・店・車道・歩道・高速チューブ・天空シャフト。辺りの景色にもわからないものはない。では、何がわからないのか。

(自分の範疇がわからない。周りと自分の境界がわからない。自分が個たりえない。ナビの現在地点がないのと同じだ。例えば地図に意味がない。どんなに歩いてもすべてが自分。どこに

行きつくこともできない。

私は存在していないのだろうか？ そんなはずはない。だって私の目は私の中から外を見ている)

『世界に触れる』

自然と人目を避けていた。どれほど歩いたのか時間の感覚もわかりづらい。そのうち、人通りが間遠になった。辺りの様相も変わった。あれほどの街中にいたはずなのに、今はもう田園風景の中。行き会う人もない。

疲れるという感覚もわかかなかった。立ち止まるという選択肢も思いつかなかった。

立ち止まらざるを得なくなつたのは、足元も見えなくなつた時だった。森の中に入っしばらくすると日も落ちて、真の闇に閉ざされた。手探りで木々の間を歩くしかない。

それでも引き返す気にはなれず、森を突き進んだ。歩いて歩いて歩き続けて、突然、目の前が開けた。沼に出た。

見上げると満月が輝いている。闇を拭いたのが、満月の光である。と彼女は知る。雲が動いて月を隠すと、また自分の手足もわからない闇に戻った。風が吹いて、雲間から光が漏れ落ちると、それにつれて世界が出来上がる。木々の陰影も、湖面の反射も、足下の草も、再び目の前に現れる。

その時、何の前触れもなく、何百、何千、何万の羽虫が地か

ら飛び立った。たんぼの綿毛ほどもない生き物。透き通った翅に月の光を映して、瞬時に、時を薄暮に戻す。体が宙に浮かのようだ。女はその様を見上げた。

（なぜ、今なのだろう。なぜ、一斉に飛び立つのだろう。なぜ、こんなにもたたくさんの意志が飛び立とうと思つたのだろう）

そんな人間の疑問符は、自然にとつては馬鹿げた戯言。あまりに圧倒的な数の様に女は、陶然と目を奪われた。

そしてまた、雲が月を隠すと、あれほどの数の虫たちは姿を消した。替わりに遠くから規則正しい足音が聞こえる。蹄の音。

音の方に木々を縫って行くと、道に出た。ただ木々を薙ぎ払って踏み固めただけの細い道だが、しっかりと轍の跡が残っている。音の正体は、この轍の主であろうか。

身を潜めたまま待つと、ほどなく目の前を馬車が通って行った。白く美しい一頭の馬が潇洒な車を引いている。御者の帽子にも、派手な羽根飾りがついていた。窓の中に人影はあつたけれど、どのような人物が乗っているのかまではわからない。ただ偶然、白い手袋の手が窓枠にかかった。それだけのことに、女の心は大きく揺れた。

「やっ……」

出会えたというのか、辿り着いたというのか、追いついたというのか。自分自身にさえ、その眩きの意味はわからなかったけれど、心の高揚は間違えのない何かを伝えている。

馬車を追うように道へ飛び出し、堅い轍跡に躓いた。森の中

を縫う細い道の先はすぐに見えない。カツカツと鳴る音だけが、地面を通じて足下から響いてくる。生い茂る木々の向こうに城の塔が見えた。闇の世界を見下ろす月に照らされた塔。別世界の塔。馬車に乗っていたのは、そこに帰って行く人なのだ、と女は悟った。

人の声が聞こえた。

「だから、間違いないと言つただろう」

今、馬車を見送つた方角から。

「それにしても、警護もついてないなんて」

「俺たちを甘くみてんのさ」

男の声。別の緊張した声加わる。

「本当にやるのか？」

男たちの会話は、明らかに人に聞かれてよいものではなからう。森の静けさに誰もいないと油断している。女は茂みに身を隠そうとした。が、微かな葉擦れの音も男たちは聞き逃さなかつた。音の方向へ身を翻し、あつという間に女を取り押さえた。

「なんでこんなところに、女が一人でいるんだ！」

目の前に現れた三人の男。他に人のいないことを警戒しつつ、すでに一人が手にしたナイフを女に振り下ろそうとしている。

「やめておけ。殺してここに放つておけば城へ戻るルートを変えられちまうぞ。お前が死体を担いでくならいけどな」

「じゃあ、どうする」

「女、ここで殺されなくなかったら、ついて来い。一言でも喋

つたら殺す。逃げたら殺す。歩けなくなったら殺す」

顔に大きな傷のあるリーダー格の男が早口にまくしたてる。隣でナイフを握った奴が鼻でせせら笑う。

「ここでやらなきゃ、どこでやってもいいんだからな」

女を引き立てつつ、男たちは風のように森を抜ける。女とは違う闇に利く目を持っている。三人に囲まれたまま走るしかなかった。生を意識した。殺されたくない。心臓が爆発しそうに脈打ち、頭も肺も酸素の欠乏で闇に引きずり込まれそうだ。

(殺される！)

意識を失ったら、足が止まったら殺される。いや、男たちの気が変わったら、殺してもいい場所に辿り着きさえしたら、殺されるのだ。死の恐怖、生への執着。女の足は止まることなく動いた。

突然男たちの方が、立ち止まった。ゆっくり歩く。森が終わった。闇も終わり、月明かりの下に畑が広がる。道に沿ってぼつりぼつりと人家の灯も見える。こんな見渡しの良い平原を走るのは確かに不審に思われるだろう。

そのうちの一軒の家の前に、十人ほどの男たちが屯している。

「自警団の奴らだ」

最初に女にナイフを向けた男が囁く。他の二人は(そんなことわかってる)とばかりに返事もしない。

「十人か、やっちゃまうか？俺一人でもどうにかなるぜ」

男はナイフではなく、上着の下の銃を握っている。

「おまえ馬鹿か、懲りない奴だな」

女の腕をつかんだ一人が呟く。

懐中電灯を向けながら、自警団の一人が道に出てきた。

「あんたらなんだね？」

これといって特徴のない中年、中肉中背の男。農家の者らしい身なりだ。

「実は、姉が例の病気で、最後に一目お城をみたいって言うもんで」

顔に傷のある男が答えると

「昼間では気が引けるんで、日が落ちてからせめてここで塔の先だけでも見せたいと連れて来たんです」

もう一人もすらすらと嘘を並べる。

「そりゃあ、難儀なことだ」

中年の男の返答に加えて、後ろの集団からも

「いい弟だな」

と、年長者らしい男が声をかける。

病気と言ったのが効いたのか、自警団は近寄って来ることもなく、四人を怪しむ様子もない。

女の目は紐るように自警団の男たちの姿を追ったが、彼らの中に逃げ込む気にはなれなかった。三人の男たちは口ばかりではなく、自警団全員を殺す能力を備えているのだろう。少しの動揺も見えない彼らに、女ははつきりそれを感じた。この穏やかな農村の男たちを自分の禍に巻き込む気にはなれない。

「俺のお袋なんか、アノイ様の姿を遠目に見ただけで、腰の曲がってるのが治つちまつたぐらいだからなあ」

自分たちがどれほど物騒な輩を見過ごそうとしているかにも気が付かず、自警団の呑気なやりとりが続く。

「それでおまえの弟が生まれたってか？」

「ばかやろう！ そういう下品な話じゃねえ」

その笑い声を後ろに、男たちの足取りはわざとゆつたりしていた。

『そして、痛い目をみる』

街中に入った。地下鉄を降りたあの街とは全く違う。饅えた匂いのする街だ。疲労困憊で辺りを見回す余裕もない。三人の男に取り囲まれながらただ歩いた。

しかし、人なかに入ってしまった事で、男たちも女を殺す機会を失った。そのままずると住処に戻った。場末の路地をさらに入って地下に降りて行く。階段は二度折れ曲がって、じめじめとした底に着いた。建物に入り、ツーツツツと灯の点滅する暗い廊下を抜け、狭い部屋の戸を開ける。食べ散らかしと散乱した毛布が男たちの生活感だった。寒い湿気た無味乾燥な部屋。その片隅に女は放っておかれた。

『逃げたら殺す』と男に言われた。手足を縛ることさえしないのは、殺すきっかけ待ちだからか。何かしたら殺す、いや、気

が向いたら殺す、と言われていたのだ。存在を消して、男たちの関心が自分に向かないように、息することさえも微かになる。

突然、戸が鳴った。どんどんと叩く者がいる。

「いちごがいらない。いなくなつた」

男の一人が戸を細く開けて、隙間から顔を出す。

「いなくなつたって……どういうことだ？」

「とにかくいいんだ」

「もう舞台の時間だろう」

「代わりを見つけて来いって、親方大騒ぎだぜ」

「めんどくせえ」

と、答えつつも男は（どうする？）というように、部屋の中の二人を振り返った。

「そこから、かつさらつてくるか？」

「そんな時間あるかよ」

「じゃあ、どうする？」

沈黙があつた。そして、

「いるじゃん」

「えっ？」

「そこに」

「馬鹿か、おまえ！」

「一応女だろ？」

「そりゃ、女だけど、いちごちゃんの代役になるかよ」

と、言いながらも男たちの目は女に向いた。値踏みしている。

「話にならないよ、あのかわいいかわいいいちごちゃんたあ、比べようもないぜ」

ひらひらと手を振りながら喋る男の言葉を抑えて、リーダーの男が断定口調で言い放つ。

「へぼ女、大いにいいじゃん。カノンが余計引き立つさ」
確かに、他に案もない。

「親方には、代わりを連れて行くと言つといてくれ」

外の男にそう言つて、戸を閉めた。三人が同時に女を振り返る。女は身の毛もよだつ思いだった。それほど、彼らの目は危険に満ちていた。

女は自分が人間である事を忘れさせられた。男たちの扱いは家畜、あるいは畏にはまった動物を処理するかのようだった。へらへらと笑いながら女を押さえつけ、服をはがしていった。その裸体のみすぼらしさを更に笑い、適度に殴りつける。ひーひーとその平手をよけようとする女の手を後ろに縛り上げ、床に転がすと、さて用意は調えたとばかりに男たちは女から興味を失った。暗い部屋の隅、冷えた床に体が凍える。何をされるのかと思うと、もう一声も挙げられない。恐怖しかない。裸で後ろ手に結わかれ、もう何の身を守る術もない。

もし男たちに人間を喰う習性があるのなら、とにかくなるべく痛みのない方法で殺してほしかった。記憶はないのに、知識は豊富に頭を過ぎる。両の足を二頭の馬に結わえて左右に走らせる刑。嫉妬した女主人に手足耳鼻すべてを切り落とされて壺

に詰められる侍女の話。息が苦しい。目の前がぐるぐる回る。

確かに、獲物を物色に出かける時間はなかったのだろう。男たちはほどなく女の裸体をずだ袋のように持ち上げて運びだした。真つ暗などこかにどきりと投げ出される。埃っぽい板敷は、木のトゲが突き刺さりそうなほど、貧相に傷んでいた。ただ、広いことはわかる。さつきまでの小部屋とは違う。それに、たぐさんの気配がある。蠢いている。待っているのだ。投げ入れられた餌が切り分けられるのを。あるいは、その口に嘔みだしてもよいと許可がおりののを。

女は失禁した。何も身に付けない股から、尿が流れ出て行く。恥もなかった。泣き声も出なかった。

突然、爆発が起きたように光が降り注いできた。ざらざらした白熱灯。熱さを感じるほどの光量。目は適応しきれず、何も見えない。

歓声が上がった。怒涛のような歓声。中には海猫のように奇声を上げる者もいる。何人かが呼んでいる。

「カノン！ カノン！」
誰かの登場。皆の待ち人が現れた。カツカツと足音を立てて向かって来る。光の中にあつて、姿は見えない。影だけが女を見下ろす。

初めの一撃は下腹部だった。ハイヒールの踵で思い切り踏みつけられる。二発目は胸。何も入っていない胃から胃液だけが口の中いっぱい吹き上がってきた。ごぼつと口から溢れ出る。

その様を見た影から上がったのは、陽気な女の笑い声だった。馬乗りになると両の手が乳房を驚掴みにした。物凄い握力だった。握力そのものより、容赦のなさが恐ろしい。何の情けもなく、人を驚つかみ踏みしだく。歓声が沸く。

それは序盤に過ぎない。完全に打ちのめされ、それでも恐怖心は増した。股の間にハイヒールが仁王立ちとなる。ぐいっと股を開かれた。馬に引き裂かれる股裂きの刑が頭に閃いた。なんの隠しようもない性器。拳が突っ込まれた。激痛、恐怖、逃れようと体をのけぞらせると、両肩がきしんで体からはずれそうになる。それでも、引き裂かれる恐怖から、体はのけぞり続けた。女性器の激痛に阻まれて、意識を失う幸もない。女は狂ったようにわめいた。なんの言葉にもならない叫びをあげ続けた。喝采を浴びせる観客への怒りも、自分の憐れな姿への羞恥も、苦悶を与える相手に対する憎悪さえ生まれる余地はなかった。ただ怖い、苦しい、痛い。

女は目を覚ました。昨夜は朦朧としたまま、運び出され、バスタブで洗われ、木のベッドに転がされた。でも今、目覚めたベッドは違っていた。

白くて気持ちのいいシート。柔らかな布団。窓からの穏やかな光。芳しい花の香さえ漂っている。

「あんだ、いくつ？」

若い女の声に問われる。そちらへ顔を向けると、ドレツサー

に向かう少女が目に入った。

「あたしより、十は上だと思うけど、処女だったなんてびつくりだわね」

少女は鏡に向かったまま、喋りながら、髪を束ねて結い上げる。

「酷い目に遭ったと思ってる？ でもさ、ものは考えようよ。殺されなくてすんだんだからさ」

立ち上がってドレツサーから白衣を出して着替える。フックにかかったバッグと鍵を手を持つ。

「寝てていいわよ。お腹空いたらテーブルの上のパン食べて。私は仕事に行つて来る。じゃあね」

ドアの閉まる音が響く。そして静まり返った。

首を動かしてゆっくり辺りを見回した。白い壁も、白い天井も、落ち着いた木目の調度も、安全を示している気がした。

(寝てていいわよ。お腹空いたらテーブルの上のパン食べて) 眠りと食を提示されたのが嬉しかった。

(ここは安心出来る場所？)

涙が溢れてきた。下半身には棍棒を突っ込んで引き抜かれた痛みが心臓の鼓動とともに脈打っている。それでも、今ここは、死と恐怖の傍らではない。安堵と心地よさがある。女は目をつむった。再びの眠りに落ちた。

目が覚めたのは、鍵の開く音だった。部屋は黄昏の色に変わっている。

「パン食べなかつたの？」
少女の声がする。

起き上がろうとすると、節々が痛んだ。その上、初めて自分が全裸のままであることを気付いた。同性とはいえ、裸で人前にいるなんて、そんな風には躡けられていない。女にとってそれはとんでもないことだった。その慌てふためく姿を、少女は大笑いした。

「なによ、いまさら」

部屋の戸口に立って、こちらを見ながら笑っている。昨夜の影、陽気な女の笑い声。

（この娘が昨日の舞台の？）

ぞくぞくとした。少女の甲高い笑い声が子宮の痛みに響く。身構えながら後ずさった。逃げようと背を見せた途端、一足飛びに少女はベッドに駆け上がり、女に飛び乗って首を絞めあげた。

「思い出した？ あたしよ、あたし！」

うつ伏せに顔を押し付けられ、やみくもに手足を振り回す女は、横に突つ伏して女を覗き込んでいる少女の目を驚くほど間近に見た。

「処女だったんだね。じゃあ、あたしが初めてのセックスの相手だよ」

少女は喉の奥でクックと笑う。

「その上命の恩人だよ。殺しちゃうっていうから、舞台の相手にしてあげたの。グロイ舞台だけど稼げるよ」

そう言いながら、少女の手は女の首を離れて、下腹部へと落ちて行く。陰毛の辺りを弄る。

「ホント、何にも感じないんだ。男も女も知らないってこういうこと？ それって残念じゃない？ その年になつてさ」

黄昏の部屋で天使のように少女は轉る。

「ここにいれば、安心よ。あんな男たちにやられることもない」

少女は自分の白衣のボタンをはずした。ベッドに立ちあがって、白衣を、そしてパンツを脱ぐ。細胞のすべてが全き秩序で並んでいる、細胞質が液体に満たされた老いのない美しい肉体だった。少女は、女の手を引いてドレッサーの前に導いた。二人の裸体が鏡に映る。自分のみすぼらしさに女は赤らんだ。

少女は獲物を捕らえて喰らおうとする雌ライオンのように舌を出して、女の目を舐めた。そのまま唇を奪い、顎を通って、喉元を味わう。乳首を舌でころがし、へそから下腹へ。昨晩のように後ろ手に縛られているわけでもないのになんかの抵抗も出来なかった。そのまま女性器まで舐められるともう立っていることもできなくなつた。

『カノン』

名前のないのは不便だと、タジーという名をつけられた。年まで、三十才と決められた。理由は少女が二十才で、十は上に見えるからだそうだ。

少女はあの舞台で呼ばれていた通り、カノンという名だった。カノンは、料理をしない。買って来た物を食べる。掃除や洗濯という習慣もない。なのに汚いのは嫌いで、ティッシュや服でよくあちこち拭いている。服は買って、着て、捨てる。部屋もよく引越すと言っていた。一つの部屋には、ベッドとドレッサー。もう一つには、テーブルと椅子。それしかないのだから引越しも楽だろう。もしかししたら、引越すときには家具も買い換えるのかもしれない。

タジーは、毎日窓から外を見て過ごした。芳しい花の香りとパンの焼ける香ばしい匂いが、開放した窓から入ってくる。それは何もない部屋を飾る。

目の前に広がるのは貧しく汚い街の屋根だが、その向こうに高層のビルが見える。あの夜の城はどこにあるのだろう。

「買い物に行きたいの」と言ってみた。

カノンはボカンとタジーを見た。

「窓の外を見る以外、何もする事がないのよ」

カノンはお金と部屋の鍵をタジーに渡した。

「でも、言っとくけど、外に出たら自分の身は自分で守ってね。

あたし、そこまで面倒みきれないわよ」

このカノンの言葉を聞いて、タジーは自分がカノンの飼った猫なのだ気付いた。女主人は帰って来ると、少し猫で遊んで、癒やされて眠る。もし、猫に逃げられてもそれだけのこと。ま

た次の猫を飼うだろう。前の猫は『いちごちゃん』と呼ばれていたのだろうか？ いちごは美しい牝猫で、カノンと暮らしながら舞台の相手も務めていた。タジーは年寄りで汚いからそんな風には使えない。間に合わせの一日だけで、翌日から舞台のお声はかからない。

では、カノンは何を気に入って連れ帰ったのだろう。

外に出てみると眩暈がした。どこにも行くところはない。逃げるというのは、行くあてのある人間の行為であろう。閉じ込められてでもいれば、それも逃げる理由になる。けれど、実際には閉じ込められてさえない。タジーにとつて、今一番安全な場所はカノンのもとなのだ。彼女の気が変わらなければ。

タジーは、鍋や俎板、包丁、食材を買って、野菜スープを作った。カノンはそれを食べても何も言わなかった。ただ食器を指差して、

「こういうものは買わないで」と言った。

タジーは、買って来た物をカノンの目に触れないところに仕舞い込んだ。

翌日、シクラメンの鉢を買って、テーブルに置いた。

「だから、こういう買い物はやめて」と念を押された。

その日作ったのはみそ汁で、それについては何も言わなかった。

翌日、バケツや帚を買ってきて掃除をした。掃除用具も鍋同

様、何も入っていない戸棚に仕舞い込んだ。だから、カノンは何も気付かない。

その日のポタージュスープについても何も言わなかった。お金がなくなると、またくれた。買って来た物は戸棚に仕舞い込んで、カノンのいない時に使った。

シーツを洗っても、帰って来るまでに乾かして、もとのようにベッドに戻した。

「このシーツ汚れないね」と言われても知らんぷりをした。カノンは、汚れたら捨てて買う。お金には不自由していないように見える。

昼間の白衣は別にコスプレではなく、近くの医院で看護婦をしているらしい。それなのに、夜まであんな風に働いているのはお金のためなのだろうか？

カノンはあけすけで饒舌で聞けばなんでも答えてくれた。

「あの舞台は私が考えて始めたのよ。ここいらじゃ一番人気。あたし、好きなのよ、ああいうことが。だから、やらせてもらえる場所があつて、お金も稼げて一石二鳥。あたしみたいのは、セックス中毒っていうんだって」

カノンがこうして話す様を、タジーは独り言のようだと思う。あるいは、ペットに話しかける飼い主。

カノンの生い立ちも聞いた。

記憶の限り、最初からセックスしていたとカノンは言う。

「赤ん坊にくわえさせるのが趣味のやつだっているしさ」

母親は病気だった。

「死にたくないから治療を受けたいのに、働けないから金はないし。『人の命は金で買える』ってのが口癖だったな」

治療を受けるために、母親はお金ではなくカノンを支払った。カノンで治療してくれる医者に縋った。

「そんなろくでもない医者の治療だから、治んなくて苦しいばかり、自分で招いた地獄、自業自得ってやつよ」

カノンはそう言い放つ。

「あたしがあいつにそう言ったら『医者があんたをどういたぶったかと治療の腕前は関係ないよ』ってへらへら笑ったよ」

カノンはそう言いながら、突然タジーの体をつかんだ。

「でもね、男でひどい目にあつたから女が好きだと思って思われるの、ホント、ヤなんだよね」

美しい眸がタジーの間近にある。

タジーはカノンの舌や指で何度も信じられないほどの恍惚を味わっている。だから、素直に頷く。

『いちい』

平穏はバランスの上に成り立っている。幼すぎて何も気付かぬ頃、あるいは老い呆けて庇護の手にも気付かぬようになってさえ、それも平穏かもしれない。病も戦争も、恋や悪意でさえ人の命を奪う突風となる。常に突風にさらされているものは、

平穩を求めたりしなくなるものなのだろうか。

カノンの携帯はよく鳴る。

「メールはあんまり読まないからね」

約束をすっぱかさされた相手の苦情にいつもそう答える。字を読むのは嫌いだと威張っている。その代わり抜群の記憶力で人の話は忘れない。だから、みんな直接電話をかけてくる。カノンは大声で話をするから、タジーンもいろいろ知ることとなる。

カノンはいい看護婦らしい。母親の関係でずっと病院で育ったようなものである。習わぬ門前の小僧といったところだ。モラルは低いくせに、決断力があるというのは、ある意味重宝されるのかもしれない。人を人とも思わなくても、明るく親切な看護婦の皮は被れる。小さな個人病院らしいが、それにしても昼の仕事場、夜の仕事場、住居がこれほど近いのによくばれないものだ。

「だって、知ってるもの」

カノンはなんなく答えてくれる。

「病院の先生はかあちゃんが死んで食べられなくなつたあたしを買ってくれた客。芝居小屋の親方も昔からの客だからね、二人が知り合いかどうかなんてわかんないけど、あたしが何してるかはどっちも知ってるでしょ。夜のバイトは好きだけども…… それでもあたしだって、年取つたらどうなっちゃうのかなあつて、ちゃんと考えたわけよ。とんでもない母親見てるからね。で、先生んとこで勉強して資格取つて看護婦になつたの」

そこでカノンは子どもじみた自慢をして胸を張る。

「あたしけつこうちゃんとしてるんだから、馬鹿にしてもらつちゃ困るよ」

『いちご』の消息が入ってきたのは、携帯ではなかった。早朝親方がやって来て、ドアのところでカノンと喋っていた。早く着替えて一緒に来いと彼女を急かしている。警察から連絡があったらしい。

「土左衛門だから、確かめに行つたつてわかるかどうか。でもまあ、埋め込まれたチップがいちごに間違いないつてことらしいから」

「それで、こんな朝っぱらから」

「おまえ、三年も一緒に暮らした仲だろ。引き取りたければ」

「やだ、ありえない。ぶよぶよなんですよ」

「なんて言い草だ！」

親方の分厚い手が、カノンの頬を思いつきりつねりあげた。

カノンは両手で親方を突き飛ばし、それを引き剥がす。

「イタツ！ 顎外れた。もう今夜の舞台でないからね！」

「いちごは十三の時から」

「そんなにいちごが可愛きや、自分で引き取つてくりやいいだろ！」

「くそっ！」

親方はカノンの目の前に、扉を叩きつけて去って行った。

「やだやだ、男のヒステリーはやだね！」

カノンは悪態を吐く。振り返ったカノンと目があつた。口の軽さとは裏腹に背筋に悪寒の走る怖い目をしていた。彼女の中の何かにスイッチが入った時の目だ。

「なんか、言いたいことあんの」

そう言いざま、すねを蹴られた。倒れ込むタジーを蹴り続ける。

「いちごは、おまえなんかと全然違う！ 見ててうっとりするくらい小さくて白くて甘いんだ」

そのまま髪の毛を掴まれ、引き摺られて、ベッドに投げ込まれた。舞台の日と同じ。恍惚とは程遠く、ただただ怖くて痛い。

体と心を踏みにじられた。

それきり、いちごの話は出なかつた。

『三人の男』

元来、カノンは忙しい。昼夜の仕事の他にも何かしている。

それが何なのかタジーにはわからない。地下の劇場のそのまた下に暮らしていた三人の男たちと関係している何か。

ある日『いいものを見せてあげる』と言うカノンに外へ連れ出された。カノンと出かけるなんて初めてのことだった。それは火曜日の昼間のことで、いつもの病院勤務をどうしたのかは

わからない。

お喋りなカノンが一言も喋らず、タジーの前を物凄い勢いで歩いて行く。必死で付いて行くしかない。いつしかビル街に入り、地下鉄にも乗った。カノンは人ごみに物怖じする風もない。睨むように前を見据えたまま、するすると抜けて行く。むしろ、周りの人々が遠慮する。そして、彼女を振り返る。カノンにはオーラがあるのだ。小さな顔に強い意志の宿った大きな目と尖った顎。細くて筋肉質な体。そして、美しく歩く。

大きなビルに入って、透明なエレベーターに乗った。屋上へのボタンを押す。他の乗客が降りて、二人になるとさりげなく天井のカメラに布をかぶせた。そして工具をバッグから取り出して、エレベーターの開閉のボタンの辺りに押し当てた。そのまま二度、三度と打ちつける。エレベーターは十二階と十三階の間で止まった。カノンは携帯で時間を確認する。それから、双眼鏡を取り出してタジーに渡した。

「向こうのビルのあの広いスペースが見える？」

タジーは首を振った。何を見ればいいのかもわからない。

カノンは携帯で画像中継を出して、それをそのまま透明なエレベーターの縁においた。

「公開処刑。映像でも見られるけど、本当に見た方がいいだろう」
画像をよく見て、双眼鏡を覗き込むとカノンの言っている意味が分かってきた。向こうのビルの途中階、外に広く張り出したスペースで、儀式が執り行われようとしている。立ち並ぶ男

たちの真ん中に、椅子おそらく公開処刑というなら電気椅子がある。画像には様々なコメントが飛んでいる。そして、双眼鏡で覗いた本物よりも、ずっとリアルに椅子に座った三人の男たちが見られた。リーダーの顔の大きな傷もはっきりわかった。カノンは再び沈黙に戻る。空は青い。ちぎれた雲が流れる。高みには風が吹いているのだろう。

コメントが騒ぐ。

「時間だ」

「あと十秒」

「マジかよ」

「ヤベエエエエエー」

そんなはやしたてる文字より、実際はずっとシンプルで、時刻になるとゆるやかに男たちの首が前に倒れ込んだ、ただそれだけのことだった。

長い間、カノンは処刑の方角を見つめていた。

カノンが振り返った時、タジーはその一撃を避けようと身を固くした。が、カノンは蹴りも殴りもしなかった。両手で自分の顔をいじって頬を膨らませたり、目尻をたらしたり、鼻を上に向けたら、変顔を作った。

「あゝあ、なんかずつと喋んなかったら顔の筋肉、固まっちゃったあ」

タジーは肩すかしを食ったようだった。今度はそのタジーの顔をつまんだり引つ張ったりし始める。タジーの顔は泣いてい

るのか笑っているのかわからないものになる。おかしい表情のまま、目だけがじつとカノンを見つめる。

「変な顔」

カノンは笑う。笑いながら言う。

「あんたを酷い目にあわせた男たちは死んだよ。いい気味でしょ」

タジーには返す言葉がなかった。

「それでも、優秀な奴らだった。それがもの見事にしくじつて、簡単にやられちゃった」

それがどういう意味なのか、タジーは考えた。

そして、思い出した。あのたくさんの羽虫の飛んだ森で男たちは話していた。

「それにしても、警護もついてないなんて」

「俺たちを甘くみてんのさ」

甘くみていたのは、男たちの方だった。だからこんなことになった。カノンは今何を考えているのだろう。一言も喋らずここまでやってきたカノンの緊張。変顔で笑うカノンの緩和。『いい気味でしょ』と言う自虐。

部屋に帰っても、処刑された三人の男のことが頭を離れない。タジーにとつて、酷い男でしかなかった。としても、一人一人に人生があつたはず。赤ん坊だった彼らを育てた人がいる。その死を嘆く者もいるだろう。

『三人の男』

そのワードが、タジの心にひとつの歌を思い起こさせた。一人の女を愛した三人の男の歌である。彼らの生きた時代は、今はもう遠い。その旋律が唇から零れ出した。

愛した女が突然死んでしまう。若い男は歎き狂う。それを黙って制する男。嘆く事も出来ぬほど暗い闇に落ちて行く男。三人の心を歌った悲しい旋律。

「やめな！」

カノンが怒鳴る。手元のコップが投げつけられた。くるりと回転したカップはタジに紅茶をぶちまけ、窓から下の道へと落ちていった。

タジは硬直した。

「なに歌ってんだよ！」

カノンが近づいてきて、すぐ脇に立つ。「自分のことはなんにもわかんなくせに、なんでそんな歌知ってるんだよ」

殴られる恐怖より好奇心が勝った。

「この歌知ってるの？」

タジは聞いた。

「恐い歌だよ。人に聞かれたら、すぐにサツが飛んで来て、牢獄にぶち込まれる」

「どうして？」

「さあね、どうしてなんだか、本当のところを知ってる人間な

んていやしないよ」

カノンの暗い眸はカップの落ちた道の向こう、川の流れる闇色を見つめる。

翌朝、カノンはいつも通り仕事に出かけた。

タジは、カノンの言いつけで、警察署に行った。階段を上りきった入り口に直立不動の警官が立っている。大きな古い建物だった。入って行く勇気を持てず、行ったり来たり立ち止まったり、物陰に隠れたり、長い間迷い続けて、ついには自分のそんな行動がどんなに不自然かという強迫観念に駆られて、口から心臓が飛び出そうな思いで中に入った。そんな思いままでして入った建物内に、タジを振り返るものなど一人もいなかった。たくさんの人間がそれぞれに様々なことを話している。やつぎばやな会話があちらこちらから耳に飛び込んでくる。

「だから、その男が悪いのになんだって、あたしが呼ばれるのよ！」

「違反はカメラの誤作動だって、認めたくせに！」

「すみません。その件に関してはもうすでに……」

「ああ、トイレはそちらですよ」

カノンに言われたように、正面の受付で「ズガール刑事を呼んで下さい」と頼んだ。出かけていると言われて「では、これを渡して下さい」と手紙を差し出した。「お名前は？」と言う質問は聞こえなかったふりをして、出口に向かう。外に出た途端、

数十メートル走って振り返ったが、別に誰も追いかけてなど来ない。

病院の仕事から帰ってきたカノンは、タジの作ったミネストローネを当たり前のように食べた。あの公開処刑以来、夜の仕事には行っていない。劇場そのものがやっついていないらしい。親方からかかってきた携帯の会話でカノンはその事を責め立てていた。

「あれくらいのものでびびるなよ！」

とはいえ、二人の足取りを追えば、あの地下に辿り着く。早々に姿をくらますというのは、正しい選択だろう。

「ウォンもいっしょ？ いいこと教えてあげるよ。奴はおいて行った方がいい。サツが追いかけてるからさ」

カノンは携帯を切った。

ガダ親方が劇場以外、どんなことをしているかは知らないが、いつも用心棒を従えているのだから、用心棒が必要な仕事をしているのだろう。カノンもそちら側の人間であろう。それなら、昼間の手紙はたれこみというやつだ、とタジは考えた。手紙は、昨晚カノンが言ったことをタジが書いたものである。

『私の仕事仲間のいちごを捜して下さい』と出だした。

『いちごは芝居小屋の人気者でした。ガダ親方の用心棒ウォンと所帯を持つと言っていないくなりました。私は騙されていると

止めたのに、いちごは言う事を聞かずに出て行きました。親方は私たちを商品と呼びます。商品に手を付けることは御法度です。所帯を持つなんてできるはずがないんです。

昨日ウォンが何食わぬ顔で親方の横に立っているのを見ました。やっぱりいちごは騙されたんです。いちごが一人でいなくなるはずがありません。どこにも行く所などないので。ここを出ても生きて行けるなら、もつとずつと前に出て行っている。あの子はもう死んでしまったに違いありません。ウォンが殺したんです。いくら言ってもいちごが言う事を聞かないから』

そこまで言ってカノンは黙った。タジはじっと待った。カノンはシャワーを浴びに行ってしまった。でも、タジはそのまま待っていた。『いちご』は禁句だ。カノンの気に入らない一言を発したら、また朝までどんな目にあわせられるかしれたものではない。

髪を拭きながら戻ってきたカノンは

「終わり」

と、言った。だから、手紙は中途半端にそこで終わった。

（あの手紙は変だ。なぜまだいちごが死んだことを知らない体を装うのだろう。最後の『いくら言ってもいちごが言う事を聞かないから』というのは、ウォンがいちごに親方の商品だから結婚できないと言ったのに、いちごが言う事を聞かないから殺してしまったということなのだろうか？）どこか辻褃の合わない

い気がした。

その夜カノンはタジーを連れて出かけた。

タジーが三人の男の歌を歌った時、カノンはあれほど怒ったけれど、

「おもしろい所に連れて行ってやるよ」

というのは、あの歌に関係のある所だという気がした。

カノンとの二回目の外出。公開処刑に連れて行かれた時には気付かなかったことにいろいろ目がいった。

饅えた臭いのする街とビル街は隣同士でどちらにも多くの人間がいる。にもかかわらず、カノンのように何気ない顔で行き来する者はいない。暗黙のルールでもあるかのように、人は各々の街で暮らし、境界を越えない。例えば、各々の世界に属する隣り合わせの店舗とビルに入った人々がその建物から出てくると、まるでそこが行き止まりでもあるかのように、間違いない自分の世界に向かって歩き出す。

カノンが街を闊歩する様を人が振り返らずにいられないのは、その傍若無人な行為のせいもあったであろう。

ただタジーは、そんなカノンも実は非常に注意深く行動していることに気付いた。街のカメラを意識している。街頭のあちらこちらを向いているカメラに目を配っている。

「カメラに映るといけないの？」

タジーの質問に

「映らないのも不自然だからね、映るのは構わない。ただ、カメラは考えるからね。なんであたしが向こうから入ってきたのか。何をするのか。どこへ行くのか。だから、納得のいく動きをしないと、たちまちありもしない罪をでっちあげられて逮捕される。やつらはそれが平和を保つ一番の方法だと思ってるからね」

（なるほど、こちらの街の人間が、汚い無法地帯へ行かないのはわかるけど、向こうからこっちへ来ないのはそういうわけなんだ）

やがて、大きな公園に着いた。公園に沿う道路は見える限りどこまでも公園に沿っている。カノンはそこで携帯を出して、タジーや風景を撮り始めた。まるでそれが目的でこちらへやってきたかのように。

そして、カメラの死角をたどって、少しずつ公園を後戻りして、ビル街に戻った。通りを渡ってすぐの地階の喫茶店へ続く階段を下りて行く。喫茶店のドアには『閉店』の札が掛かっている。カノンは躊躇することなく、入って行く。薄暗い誰もいない店内を突っ切ると、またドアがあった。それを押し開けると、もっと深く潜っていく階段がある。何度も折れ曲がり、地の底へ下りて行くような階段だった。そして、地の底に着くと、今度は横穴である。

「なにかあっても、死体も出てこないだろうね」

カノンがタジーの心を見透かしたような独り言を言った。

行き着いた先はもつと驚きだった。広い劇場になっている。ガダ親方の芝居小屋も地下だったけれど、比べるべくもない。規模や造りもさることながら大きく違うのは観客だ。ビル街を歩いてきた小奇麗な住人がそのままここにいます。いやむしろ、もつと上品で金持ちそうだった。

カノンとタジーが着くとすぐに開幕のベルが鳴り、客席の灯りが消えた。舞台の上で物語が始まる。

先読みの力を持つ巫女を三人の男が愛した。それぞれが、いかに愛したかを歌う。

初めの男は、綱につながれたまま生きてきた。木偶の坊と蔑まされながらも、それは自分の兄弟を殺して生き残った当然の報いなのだと思っていた。巫女は彼に言った。あなただけでは。動物も植物もみんなそんな風に、自分が生き残るために他者を犠牲にして生きています。彼は綱から解き放たれた。

二人目の男は、絶望していた。生まれてからずっと、飢えたまま閉じ込められていた。生への執着だけでやっとなんか延びた。だから何もかもを取り戻そうと足掻きながら大人になった。それほどに心血を注いだのに、最も愛した我が子を失ったときにはもう自分に刃を突き立てるしか、憤りを収める術がなかった。巫女は「いっしょに生きよ」と命じた。「わたしには見える目、あなたには見えない目が与えられている。選択のときがやってくる」その不思議な言葉に導かれて彼は再び生きることを選んだ。

三人目、巫女の愛した男は、巫女の弟であり、神であった。まだ若く未熟で自分が何者であるかも知らなかった。だから、人である巫女の死すべき運命を知っただけで、怯えきってしまつた。

タジーは、冒頭から夢中になった。その筋書はなつかしく、熟知している。絢爛たる絵巻が目の前に展開する。役者にも音楽にも背景にも衣装にも、魅了されて息もつけなない。

ラストは、タジーの口をついて出たあの歌だった。

巫女が赤子を産んで死んだ。満月と満開の桜のもと。狂つた獅子のように咆哮する年若い神に物言わぬ従者、綱につながれていた男が縋り付いている。どれほどに傷ついてもその手を放すことなく、むしろ腕の中の神以上に巫女の死を哀しみながら。二人の蹴散らす砂と桜の花弁は舞い上がり、強風が空の雲を走らせる。

神の心を抑えたのは、絶望する男だった。彼の心は闇を呑んでいる。彼は厳然と言い放つ。

「巫女は死んだ。お前の子を産んで、お前のせいで死んだ」

風は止む。雲は止まる。月明かりだけが下りてくる。若い神は静かに眠りにつく。

舞台が終わっても、立ち上がることも出来ないで、タジーは泣いていた。カノンが呆れて、彼女を席から引き立てた。

観客が皆立ち上がるといかに広く思えた空間も混雑した。ただ、さすがにこれだけの人数が喫茶店からの階段と通路を歩い

てきたわけではなく、三々五々散って行く。地上に通ずるルートはいくつもあるのだろう。

「めんどくさい奴だね、不細工なのに、よけいひどくなるよ」

カノンの言葉に、ポケットのハンカチを出して、顔の涙やら鼻水やらを拭くと、

「へえ、そんなもん持ち歩くんだ」

と、カノンが言った。

その時、密集した観客の一角が大きくどよめいた。それは、連鎖するようにあちこち広がる。身動き出来ない状態で人々が戸惑う。パニックに陥って行く。

カノンの目はそんな人間たちを冷静に見つめながら四方へ動く。

（えっ？ えっ？）

何が起きたのかタジーが思うより早く、カノンは動きだしていた。タジーの手をつかんで、人を強引にかき分ける。隠し戸まで辿り着くとその前に小さく屈んで戸を細く押し開き、通路へ飛び込んだ。

中に入った途端、戸はびたつと閉まったが、気付かれた。

「隠し戸になってるぞ」

と言う声が外で聞こえた。

「地上につながっているかもしれない」

太い男の声が答えている。ゴトゴトと音がして戸が開いた。

何人かが後についてくる。

しかし、カノンはそんなことにはかまわずどんどん走って行く。来た道である。横道を走り、階段を上り、喫茶店を通って地上に出た。

「あんたはそこに隠れて十数えてから、公園に逃げな」

そう言って、カノンは道路を走り去った。タジーは喫茶店の看板の陰に隠れた。言われたように十数えて公園に飛び込んだ。が、そのタイミングで、タジーの後ろを追いかけてきた集団とはちあわせすることになった。

公園で、彼らと対峙する。四人の男は、今劇場にいた大多数の男たちと同じような服装をしていた。しかし、それは目立たないためのカモフラージュであろう。その下の肉体が職業を暗に示している。がっしりとした首の太さ。常に辺りを窺う目の配り。おそらく、彼らの半分の体重もなさそうな五人目の男のボディガードであろう。その五人目の男は、ここまで走った距離がもう限界だとばかりに、息を切らせている。極めて華奢で、顔色も悪かった。今にも倒れそうな様子で、左右を支えられながら立っている。

公園の街灯の下で、タジーは彼らをしげしげと見つめた。

「どうする？」

一番年長らしい銀髪の男にもう一人が尋ねる。手に持っているのは、明らかに模造とは思えない銃である。

（まただ）

タジーは思った。森の中で捕まった時も、男たちはタジーを

取り囲んで殺す算段をしていた。こんな短期間に二度もこんな目にあうなんて。

(ここはそんな世界なんだ)

殺すことよって、面倒を解決しようとする、あるいはそれが許されている、いや大目にみられている。

それにしても、ただ、と思う自分自身にもタジーは驚いた。
(こんなことに慣れてしまわないで)

いや、銃はナイフよりもっと分が悪い。

男たちは検討する。

「あんな抜け道があるなんて…… それを知っていた女だ」

「でも、お陰で助かった。他の出入口は全部待ち伏せられていただろう」

(そうか、それで引き返してきた観客で混乱したのか)

劇場での騒ぎが思い起こされた。外に出てすぐカノンがタジーをおいて走り出したのは待ち伏せを引き付けようとしたのだろうか？

その時、支えられていた華奢な男が咳込み始めた。咳の間にヒーツというように、呼吸が引きつる。

「馬車を回せ」

彼を抱きかかえていた男が携帯で指示を出す。

「こんな所で電波を飛ばすな！」

他の一人が制する。

馬車という言葉がタジーに、森で目の前を通り過ぎた白い手

袋を思い起こさせた。

咳は止まらない。人を不安にする咳だ。次の瞬間にも息を止めそうな引き攣り方をする。

屈強な四人の男は明らかに狼狽している。

「そんなこと言ったられないだろう」

「王子をすぐに城へ」

(オー、王子???)

タジーはその意味不明な言葉に首を傾げた。男たちは、人に聞かせてはならない言葉を口にしていった。

そんな輪の中に飛び込んできた者がいた。

「どきな！」

カノンが戻って来たのだ。男たちを押しつけ、王子と呼ばれた男を抱える。

「あたしは看護婦だし、薬も持つてる、邪魔しないことだよ」

男たちは一歩下がるしかない。カノンは、王子を草の上に寝かせ、首の周りを緩めて胸を押し広げた。見えるかぎりのところに、傷があった。古いもの新しいもの。白すぎる肌が無残に切り刻まれている。

薬は錠剤で咳込んでいる男に飲ませられるようなものではなかった。カノンはそれをカリカリと噛んだ。口の中で唾液と混ぜ合わせる。そして、タジーを愛撫するときのように王子の首筋に指を這わせ、力を込めていく。息が止まるように(ヒック)と喉が痙攣した。その時、王子に唇を押し当てた。王子の喉が

ゴクリと鳴る。それでも、カノンは長く王子の唇を吸い続けている。体を離すとき、カノンは手の甲で口の端の唾を拭いた。タジーは自分とカノンのセックスを見ているような気がした。

咳は止まった。絶え絶えだが、王子の胸は空気を吸って吐いている。黒い髪が汗で額や頬に張り付いている。カノンの滑らかな指がそれをかき上げていく。それから、ゆっくりと顔を耳元に近づけた。

カノンは囁く。

「忘れないで、私はカノン。あなたの命の恩人よ。あなたのおつきのもんがあたしを後ろから撃ち殺そうとしたらちゃんと止めてよね」

それから、すくつと立ち上がると、タジーの手を引いて道路の方へ歩き出した。

一瞬間をあけた男たちだが、次には一斉に銃口を立ち去ろうとする女に向けた。

「撃つな」

銃を握る男たちを王子の声が制した。どうにか自力で頭を動かす。視線を立ち去ろうとする者へと向ける。カノンは去って行く。振り返ることはもちろん、大股の歩みを緩めることもない。今の出来事などすでに忘れてしまっているかのような、なんの執着もない後姿。

『行かせないで』

という台詞が王子の頭に浮かんだ。今観た『離神』の四段、

化け物の容かたちの女が言うのだ。

『行かせないで』

けれど、行ってしまおう。王子同様、生きていくにはあまりに不都合な体を持った女が、どんなに手を伸ばしても届かない後姿。

真夜中の満月に向かうのならかな勾配。無音の白く浮き立つ道を去って行く。月影に抱かれ、細く長い影を地に這わせながら。

『行かせないで』

その声は決して届かない。

『パン屋』

芝居を観てから、タジーの心は少しずつ変化した。自分に関する記憶は何も蘇ってこないけれど、たくさんのが思い出せた。もし三十才であるなら、三十年の人生があつたはず。それが緩やかに手元に戻ってくる。

料理がわかる。音楽がわかる。本も好きだった。テレビの番組もいくつかわかえがある。

『離神』が禁書であること、それにまつわるエピソードも知っていた。テロで血が流れた。地下に住む彼らは、ドブネズミどもと蔑まれた。けれど彼らはそれをあざ笑うかのように、自らをネズ教徒と名乗った。それが始まりだと習った気がする。果

たしてなんの始まりなのか、覚えてもいない。歴史の中のことである。

そして何より、記憶がなくても、自分がこんな日々を送っていなかったことだけはわかる。もつとずつと普通の生活だった。殺されるなどというのは、小説やドラマの中の出来事ではない。この世界でたくさん血が流されていることは知っていたけれど、タジーは平和に暮らしていた。普通に暮らしていた。

初めて買い物に行きたいと言った時、

「でも、言っとくけど、外に出たら自分の身は自分で守ってね。あたし、そこまで面倒みきれないわよ」と、カノンに言われた。

今はそのこの意味がよくわかる。三日前、タジーは、買い物に出て、男たちに襲われた。何人いただろう。何回挿入されただろう。白昼堂々と犯された。あつという間の出来事だった。痛む女性器に股を広げたまま歯を食いしばりながら歩いて帰ってきた。部屋に入って、やつと泣けた。おんおん泣きながら、床に突っ伏しているうちに、夕方になってカノンが帰ってきた。カノンは何も言わなかった。タジーを浴室に連れて行って、まるで雨道の跳ね返りに汚れた自転車を洗うように彼女を洗った。血やら精液やらをシャボンのついた手が拭う。股が綺麗になると、彼女はなんの躊躇もなく口づけしてそのまま浴室でタジーを抱いた。

それでもやつぱり買い物に行かないのは不便だった。タジーはおずおずと外に出てみた。びくびく辺りを見回しながら歩く。(恐らく私はこの街に足を踏み入れたことのない、そういう類の人間なのだ)

でも、カノンはここで生まれ育った。生き抜いてきた。(私はカノンの庇護のもとでやつと生きていく)

この街に若い女性の姿はほとんど見えない。ガダ親方の劇場が繁盛する意味がわかる。街の男女比が違い過ぎるのか、隠れているのか。一度行つた警察署は蜂の巣を突いたような場所だった。犯罪と暴力が多すぎる。

タジーは付けてくる男に気付いた。自分を襲った奴かもしれない。戻るべきか、いやそれでは家を知られてしまう。心臓が駆けるように脈打ち出した。

目の前にパン屋があった。パン屋に飛び込む。古い小さな店である。パンの焼ける香ばしい匂いが鼻をくすぐる。店の片隅の木の椅子に老婦人が腰かけている。(いらっしやいませ)と声をかけられた。

タジーはあいまいに会釈して、パンを選ぶふりしながら、外を見た。その視線を追って、老婦人も外を見る。

「付けられているの？」

尋ねられた。男はパン屋の中を窺っている。

「よくわからないんですけど……」

タジーは口ごもる。

外の男は、通りを渡ってきたもう一人の男に（そのパン屋に入った）とでも言うように、顎をしやくつてみせた。

日中街中で犯された時のことを思うと気が遠くなりそうだった。足が震えた。老婦人の気の毒そうな視線に合うと、涙が零れそうになる。

「中でお茶でもいかが？」

老婦人が外を気にしながら、店の奥へタジーを入れてくれた。店からすぐに、ダイニングスペースになっていて、テーブルと椅子、台所、食器棚、冷蔵庫があった。掃除が行き届いている。流しの出窓に白い小さな花が見える。

「近頃は物騒で、買い物ひとつも不自由ねえ」

紅茶を入れながら、婦人はゆったりと話す。この界限には少々似つかわしくない品の良い女性だった。

「あなたも一休みしたら」

パンを作っているらしい奥の男性に声をかける。

「こつちにもらうよ」

出てきたのは主人と思しき男性で、お盆に二つの紅茶を乗せて戻って行った。

「どうも、主人も息子も女性は苦手らしくて、特にこんな若い方はねえ」

「若くないです」

思わずはつきり答えて、

「まあ〜」

と、婦人に笑われた。

「こんなおばあちゃんから見たら、あなたは十分若いわよ」

婦人は店に戻って、パンを一つお皿にのせて来た。

「うちの一番人気のパンなのよ。お口にあうかしら？」

タジーの前に置き、

「美味しかったら、常連さんになって下さいね」

と、言ってしまう、

「あら、私って商売上手だわ」

と、笑った。老婦人の言葉にタジーも笑った。

なつかしい風景。笑いながらお茶を飲んで過ごす。

タジーには、話すべき人生がなかったけれど、婦人はご主人と大恋愛だったらしく、いろいろと話してくれた。ゆっくりとお茶を飲みながら婦人の話に耳を傾ける。

「一人息子と三人でもう十分な人生だけど、私たちがいなくなつたらと思うと」

「息子さんはおいくつなんですか？」

「もう、四十過ぎ。でも頭が小さな子どものまんまだから。主人が教え込んで、パンを作る腕前はいいんだけど」

タジーはパンを味わいながら、大きく頷いた。美味しいパンである。

「それだけじゃ、店はやっていけないものね。普通の人だつて、この街じゃなかなか結婚出来ないのに、うちの息子じゃあとして

も無理。孫の顔はとうに諦めたけど、あの子がどうなるかと思
うと」

タジーには、何とも答えようがない。

「ごめんさい。ついつい変な話になっちゃったわね」

結局、タジーは水を買って、それを部屋まで運んでもらうこ
とにした。知恵遅れの息子は、確かにそんな顔をした大男だっ
た。軽々とペットボトルの入った箱を持って、タジーの後を付
いてきた。外にはもう待ち伏せる男の姿はなかった。

離れた市場や店への買い物はやめた。料金を払ってパン屋の
息子に頼むことになった。その分パン屋にはよく立ち寄る。こ
の街での唯一の知り合いだ。お茶を飲んで世間話ができる。

持ってきた重い荷物を部屋の中の戸棚まで入れてもらったあ
と、息子にはチョコや飴などのお菓子をあげた。母親の言うよ
うに、大きな体をした子どもでしかない。だから、何度目か部
屋に入れた時、突然覆いかぶさってきたのには驚いた。

「何するの！」

荒い息が吹きかかる。街で襲ってきた男たちと同じだ。ただ
違うのはタジー自身がすでに一度そういう経験をしていること。

思いっきり平手でビンタすると、大男は泣き出した。まるで
子どものような手放しの泣き方だ。

「泣かないでよ」

タジーにしては珍しくぞんざいな口をきいた。なんで襲おう

とした男が被害者のように泣き出すのかイラツとした。その上、
男は泣きながらもタジーに抱きついてくる。ひっぱたくと、ま
た叩かれた頬を抑えて情けなく泣く。
めそめそと泣きながら、手が股間を抑える。膨らみ切ってい
る。

「そうか、一回も使ったことないんだ」

それはおかしい同情だった。子どもの知恵しか持たない大男
が一人前の性欲のある下半身をどうしたらいいのか？

タジーは上着を脱いだ。上半身裸になって、男に見せた。イ
ノシシのように突進してきた男は涎をたらしながら、タジーの
貧弱な乳房を食った。貪りながら股間がもう濡れている。あつ
という間に射精してしまったらしい。

「私の言うことちゃんと聞くなら、またこの胸をしゃぶらせて
あげる。わかった？ いい？ わかった？」

その日はそこまで帰した。

この状況を隠すのはむずかしい。大男はすでにタジーに夢中
になってしまった。コントロールせねばならない。頭が子ども
でも、体は大人なのである。これは正常な行動なのかもしれない。
タジーはあったことを正直に彼の母親に話した。母親は当
惑した。タジーの考えていることがわからない。これは犯罪だ。
息子がお客の家にがりこんで、彼女を襲ったのである。訴え
られて当たり前な行為を、タジーはただ淡々と話す。

「申し訳ありません。もう二度と息子をお宅に伺わせたり致し

ませんので」

老婦人は涙ぐみながら謝罪する。

(そんな意味で話したんじゃない)

どうしたら上手く説明出来るのだろう、とタジューは考えた。そして、結局結論だけを口にした。

「結婚して、ここでパン屋になりたいんです」

婦人は返す言葉がなかった。

主人を加えて話をした。

「何を疑っているわけでもないけれど」

会話のそここで何度も夫婦はそう言った。

この降って湧いた話をどう受け止めたらいいいのか……。

「こんな日がくるとは思ってもいなかった。まともな女性が息子を相手にするはずがない」

主人の懸念は息子への愛情であろう。それでも、

「ホントなの！」

という婦人の念押しに、

「はい」

と答えるのはうそではない。心の底から普通の生活をしたいと思っている。

「あの子は五才児ほどの知恵もないのよ」

「わかってます」

タジューは言った。夫婦の目に涙が浮かんでいる。

「ただ、今すぐは無理なんです。少し待ってほしいんです。解

決せねばならないことがあるので」

カノンの存在をどう説明したらいいのだろう。記憶のないことを説明するのもむずかしい。このパン屋は、普通の家なのである。処刑されたり、銃を向けられたりするカノンの身の回りとは違う。突然の嫁取りに、老いた親たちはうれし涙を流している。彼らは、タジューがその体を毎夜レズビアンの人に抱かれていると知っても、息子の相手として喜んでくれるだろうか？

タジューはカノンの部屋で掃除したり、料理を作ったりしなくなった。初めてパン屋の食卓でビシソワーズを作ったとき、大男は満面の笑みで美味しい美味しいと何杯もおかわりした。その姿を見守る老夫婦も笑っていた。

タジューの体ばかりを欲しがっていた息子は、母親に言い聞かせられ、場をわかまえるようになってきた。やみくもに組み敷くセックスにもいたわる態度が出てきた。そうなると、タジューの心も、太すぎる男根や肉の余った重い体、強い体臭、せわしない息遣いに寛容になった。カノンに与えられる恍惚とは比べようもなくとも、男を愛おしく思う気持ちも湧いた。性交が官能ではない子を作るための営みだと気が付いた。

タジューはカノンが自分に飽きることを期待していた。いちごのように可愛い子猫を見つけてきて、タジューを追い出してくれればそれで済む。(ここを出て行く)と波風の立つことを言う必要もない。

所詮、タジューは大事なペットのいなくなった日にたまたま拾

った汚い猫なのだ。いなくなっても気にもかけないかもしれない。が、パン屋とこれだけ近い距離では、追い出される方が後腐れがない。

カノンとタジীর関係は出会いで決定付けられた。タジীরは暴力と恐怖で完全に隷属している。カノンはそうして人を支配することに長けている。万が一、出て行くと行って、カノンが激怒したら、と思うとタジীরに試してみる勇氣はなかった。

その日、普通に始まったカノンとのセックスはどんどんエスカレートしていった。慣れた時間であるのに、少しづつ怖くなってきた。乳房を握る力がいつもより強い。首筋を吸いながら歯をたてる。性器に押し入る指が乱暴すぎて傷つけられる。

「痛い！」

タジীরがそう拒んでも、カノンの力はいっこうに緩まない。恍惚に辿り着いて体が弛緩する。それでも少しの間もあけず、カノンの足が指が舌がまとわりついてくる。終わることなく攻め続けられる。

「もうよして」

タジীরの懇願をあざ笑うようにカノンは無言で激しさを増す。延々と繰り返された。

何度目かに達すると足の筋肉どころか、脇腹の筋肉が攣った。痛くてカノンを押しつけるのと、その手を捻じ曲げられた。骨が折れるかと思うほどの力。タジীরの体を全く斟酌しない力だった。

た。

もう疲れ切ってどこにも力が入らない。痛めつけられても身構える余裕もない。ただの肉塊になりはてた。それでもカノンは何度でも割入って痛みを増幅させる。

「お願い、もう許して」

カノンは何も答えない。

「許して」

体が痙攣し続ける。

氣を失ったのか、眠ったのかも定かではない。目が覚めると、カノンが服を着て外套まで羽織って、窓辺に立って外を見ていた。深夜の高い月が彼女の横顔を照らす。焦げ臭いにおいがする。痛む体をやっと起こすと、カノンが振り返って言った。

「パンを焼く店が焼かれてるわ」

口の端が野獣のようにめくれ上がって笑っている。

タジীরは裸のまま窓辺から身を乗り出した。間違ひなく老婦人のパン屋だった。コートを羽織って、外に飛び出した。裸足のまま、パン屋まで走った。

火は小さなパン屋を完全に呑み込んで燃え上がっていた。夜空に黒煙が上って行く。見物人が取り囲んでいる。それを押し分けて、一番前に飛び出した。我が家が燃えるのをなすすべなく見やる家人のように、ヒーヒーと息を吐きながら、叫びのような悲鳴をあげながら、右へ左へうろろうと歩き、拳で膝をうち、地団太を踏む。火の粉をあびて髪がちりちりと燃えた。

目の前を担架が通る。焼け焦げた死体が運ばれて行く。とりすがろうとして、焦げた人型と視線があつた。

「あーあー」

もう何がなんなのかわからない。言葉もわからない。目の前の光景がぐるぐると回り出す。

タジーは背を向けた。逃げ出した。この場所から、現実から。どうする術があるだろう。どうすれば良かったのだろう。どうにもならない！ 死者を取り戻すことは出来ない。時を巻き戻すことは出来ない。

暗い川面に沿って走った。沈黙に耐えきれず、声をあげている。「あーあー」口を締めることも出来ず、涎を垂れ流し、声を垂れ流す。平衡を失った体は前にのめり、次の一步を止めることも出来ない。躓いて、砂利の上に倒れ、やっと止まった。口に入った砂が喉に詰まった。

追いかけてきた誰かが馬乗りになった。

よく知った重み。よく知った体温。カノンだった。

両肩をつかまれ、仰向けにねじられた。コートも脱げて、裸のまま地に礫になった。

「ハハハハ」

カノンは笑っている。

「ああ、いい気味だ、いい気味だ」

歯を剥き出しながら、笑い続ける。

意地の悪い猿だ。タジーの上に立ち上がって飛び跳ねる。人

の柔らかさの上になんの加減もなく全体重をのせる。口から肛門から内臓が吹き出そうになる。

「まるで焼き豚だったろう、小汚い脂まみれの男、焼けた方がずっといい」

このお仕置きが彼女にとつてどれほど楽しいことなのか！ 「あんたが悪いんだよ。あんなに可愛がつてやったのに」

カノンは上機嫌で喋りまくる。

「くそー」

最後に、カノンはタジーの顎を蹴りあげた。首が吹き飛びそうだった。そして、ゆっくりしやがむと、顔を寄せてくる。首に手をかける。指に力が入る。カノンの顔が陶然とした表情を浮かべる。

「セックスより余程いい」

馬乗りになって股間を押し付けてくる。

「ああ、いい、いい」

指が喉に食い込む。

タジーは苦しさに喘いだ。空気を求めて、肺と頭が爆発する。それを、

「いいよ、いいよ」

と、カノンはつぶやき続ける。タジーの苦悶に酔っている。

タジーの中を怒りが噴き上がった。

（イマの、ワタシが、カノンをヨロコばせている！ こんなにクルシイのに！）

タジの苦悶は内ではなく、外に向けて爆発した。怒りがアドレナリンを噴出する。殺したいと思つた。

「罅り殺しにしたい！ 八つ裂きにしたい！ 何と引き換えても目の前の女を殺したい！」

空気ではない他の何かが思慮を与えた。絶え絶えの息でタジは哀れに訴えた。

「普通に暮らしたかった」

何がカノンの引き金になるか知っている。

「ナニ？ ナニ！」

カノンが怒鳴る。

「子どもが欲しかった」

何がカノンに火を点けるか知っている。

「フツ、フツ、フツ、フツ、コドモ、コドモ、コドモ」

顔が歪む。歯ぎしりする。目の玉が寄る。

「叫べ、悔しがれ！」

なおもタジは言い募る。

「男に抱かれたかった、精液が欲しかった」

カノンの鬼の形相。もうタジの中に恐怖はない。ふつふつとわくどす黒い感情。

カノンの体を引き裂けないなら、心を八つ裂きにしたい、血

まみれに、ずたずたに。

「快樂で殺されるなんて真つ平！ 怒り狂って殺せばいい！」

「どいつもこいつも、どいつもこいつも」

カノンは罵る。怒りのあまりわなわなと震えながら。

「いちごといい、あんたといい」

口から泡を吹いている。

「男なんかやられちまって、あんな豚男に」

（そういうこと？）

『いくら言ってもいちごが言う事を聞かないから』

タジはカノンにたれこみの文を書かせられた。これが最後の一行だった。その後、続く言葉は出てこなかった。

あれは、そういうこと。

（カノンがいちごを殺した）

ウオンと結婚するといつて言う事を聞かないから殺した。

こうやって首を絞めて殺した。

まだ、十七才の小さくて可愛いいちごをカノンが殺した。

「この手でいちごを殺した！」

タジは首を絞めるカノンの手に爪を立てた。そのまま思いつきりカノンを突き飛ばす。立ち上がって一歩二歩と踏み出した。

「いまさら、こんなことに気付くなんて馬鹿みたい」

タジはよろめきながら歩く。黒い川へ向かう。

「待てよ、待てよ、言ってるだろう！」

地団太踏んで悔しがりながら、カノンが追ってくる。カノンの

手が追ってくる。タジをつかむ。

「人殺しの変態女、私はあんたなんかには殺されない！」

手を振り払う。勢いついたまま、ぐらりと揺れたタジーの体は川へと落ちていく。カノンの目と同じ闇色の川。何を呑みこんだのかもわからぬ深い暗さに満ちている。

ざんぶりと水の中、息も出来ない。苦しいのは結局首を絞められているのと同じ。一息でも空気が欲しいと、水面に出ようと足掻きながら流されて行った。

ひととき闇に落ちたのに、体をつかまれて意識が戻った。呼吸している。水面に顔が出ている。タジーは目を開けた。左腕が河岸の枝に引つ掛かってねじれている。意識が戻った途端、冷たくて痛かった。のろのろと枝に手をかけて体を引き上げる。辺りは夜のまま。川から上がっても、寒さや痛みは変わらない。朦朧とした意識が視界を歪ませる。それでも、しばらくするとその場所には見覚えがあった。

(こ……えん???)

ついこの間、訪れた。

(誰と? なぜ?)

舞台を観るために。

(悲しい話だった)

混濁する記憶を辿りながらゆらゆら歩く。水滴が落ちる。裸足の足裏が傷つく。

「い……た……い」

(痛いのはもういやだ。苦しいのはもういやだ)

「ううう」

嗚咽する。泣けてくる。

(死ぬのだ)

と、思った。

声にならなくても歌が口の端に上ってきた。

(もう死ぬのだから……歌おう)

かすれて息ばかりの旋律が夜の空を辿る。それは挽き歌。

(挽かれて行くのは誰の棺? ごめんなさい、ごめんなさい)

老婦人に、息子に、ご主人に。あの居心地の良い家に。

(私が壊した。私が禍)

謝っても謝りきれない。

婦人は息子の行く末を案じていた。それはなんと穏やかな悩みだったろう。少なくとももう何年か、十何年か、そのまま平穩に包まれていられるはずだったのに。

「誰?」

誰何の声。

気配が動いた。目を向けると、木の下のベンチから人が立ち上がった。近づいて来る。足音は微かだ。

「カノン?」

足音と同じくらい微かな声が尋ねる。

繁みから月明かりに歩み出ると、男の容かたちが見えた。黒い髪、

黒い瞳、白い肌。

「また、会えるかもしれないと思って、待っていたんだ」

（待っていた？ あたしを？ ううん、カノンを）

タジ―は男を見た。

（なんてバカな男なの！ カノンを待つなんて？

その上、私をカノンと間違えるなんて）

馬鹿馬鹿しくてくだらなくて呆れ返る。

（もう誰も私を待っていない。カノンが粉々に砕いた。あなたは本当にカノンを待っているの？ カノンをわかっているの！）

握りしめた拳を近づいてきた男に振り下ろした。が、それは

拳ともいえない。男の胸に倒れこんだだけ。素肌に男の服が触れて、初めて自分が裸であることに気付いた。

複数の男が駆け寄ってくる。見覚えがある。この前ここで見た。

タジ―たちに銃を向けた奴ら。

倒れ込んだタジ―の体をその男は受け止めきれず、彼女は道に転がった。

意識が薄れていく中で、饅えた街での記憶が蘇る。そこでタジ―は、男たちによって道に押し倒された。

（犯される）

タジ―は思った。

（引き裂かれて死ぬんだ）

両足を二頭の馬に結わかれて、真つ二つに裂かれる。そのウ

イジョンさえ今はもう怖くない。

（もういい。早く終わらせて）

諦めた。

「カノン」

男の声が再びその名を呼ぶ。上着を脱いで、タジ―の体をくむ。抱きしめられる。もう一度目を開けて男の顔を見た。間近に迫った案じる男の顔。

「王子？」

タジ―は意識を失った。

離神年代記「埋葬」第二章 饅えた街 終わり

第二章 城に続く